京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会

講演内容　『パーキンソン病／リハビリテーション』
～ 演じて　ひらく　こころ・からだ・つながり　～

日　時　2025年11月29日（土）　13:30～16:30（受付　13:00～）

講　師　一般社団法人 ART ＆ HEALTHきょうと
代表理事　細見 佳代先生

定　員　60名　要予約　申込受付は11月10日（月）10:00～

各種感染症等拡大防止のため、定員を設けております。
参加ご希望の方は、必ず京都難病連へ電話でお申し込みください。

その他　個別相談／交流会は行いません。

会　場　ハートピア京都　3階　大会議室

京都府立総合社会福祉会館
〒604-0874　京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町375番地

主催　NPO法人京都難病連
申込み・お問合せ　TEL　075-822-2691（平日10:00～16:00）

今回の演劇は、パーキンソン病患者が演技を書き、出演もします。身体の動きや声も字も小さくなってしまいがちなのがパーキンソン病患者です。意識して声を出し、身体を動かしましょう。

会報誌　Vol.1　「ともに」2025年3月号
26・27ページに効用など詳細記載しています。
ご参照ください。

スケジュール

令和７年１１月２９日（土）

１３時３０分～１６時

（受付　１３時開始）

場所　ハートピア京都
（烏丸丸太町）大会議室

秋のリハビリ講演会

舞台演劇の手法を使った
「声と体のトレーニング」

京都市委託事業、京都難病連主催　パーキンソン病友の会共催

演劇講師：一般社団法人 ART＆HEALTH

きょうと代表理事　細見佳代先生

京都市委託事業 秋のリハビリ講演会

飛べ！
ポンコツロボット

50歳からのハローシアター演劇上演

～ あらすじ ～

近未来。パーキンソン病を抱えるヨウコは、介護ロボットカナビンと共に暮らしている。
だが老朽化が進むにつれ、ロボットは少しずつヨウコ自身に似てきて――？

＜作者のことば＞ パーキンソン病とともに歩んで18年。
まだ十分に理解されていないこの病を、多くの方に知っていただきたいと願い、台本を書きました。病を通して気づいたことを舞台にのせました。
支えてくださった仲間に感謝し、観てくださる皆さまに少しでも想いが伝われば幸いです。

日時　2025年11月29日（土）
13:30 ～舞台演劇の手法を使った「声と体のトレーニング」
14:45 ～演劇上演「飛べ！ポンコツロボット」
15:30 ～アフタートーク・交流会

会場　ハートピア 京都　大会議室

出演

進行役/作者	マコ	ヨウコの父	池田忠紀
ヨウコ	ランゼア	ヨウコの母	あかさたはまこ
カナビン	岩井一枝	友人1・ロボット1	四方 眞由美
ヨウコの夫	コータロー	友人2・ロボット2	れいこ
ヨウコの娘	小笹由紀子		

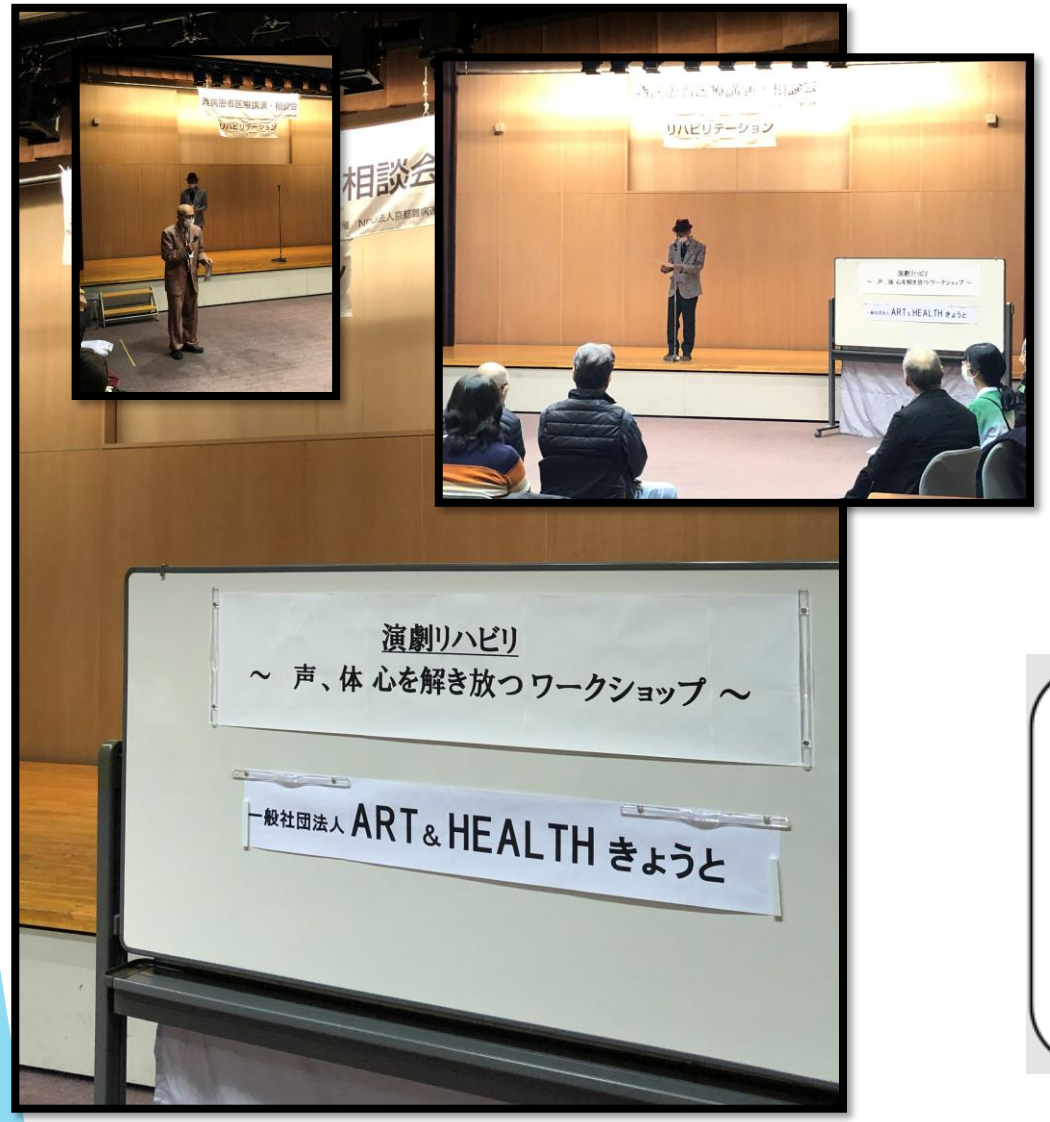
原作　マコ　／　台本協力　50歳からのハローシアター メンバー
構成・演出　植見佳代／舞台スタッフ　佐々木しゅう・西川弘・OGG　・個滑
＜Special Thanks＞パーキンソン病友の会の皆様

主催　京都難病連
共催　パーキンソン病友の会／一般社団法人 ART＆HEALTH きょうと

京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会／リハビリテーション

- 患者会挨拶　～　講師紹介



＜講師＞　細見佳代

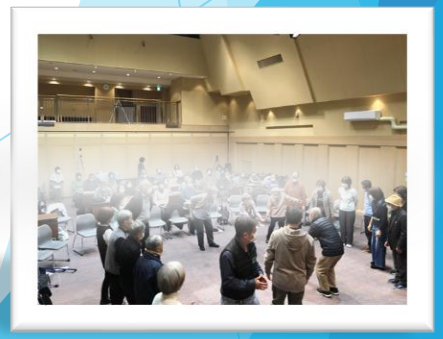
社会福祉士、演劇講師、芸術修士。(一社)ART ＆ HEALTH きょうと代表理事。
これまで延べ4,000人の高齢者に向け、心身の活性化や創造性を引き出す演劇講座を実施。「50歳からのハローシアター」ディレクターとして、全国シニア演劇大会や京都シニア演劇フェスティバルに参加。
脳性麻痺の父を通して障がいのある方の身体表現に関心を持ち、共同創作も行う。
参加者が持つ力を自然に引き出す指導に定評がある。
「50歳からのハローシアター」にはパーキンソン病のメンバーも在籍。

京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会／リハビリテーション

- 第１部　ワークショップ

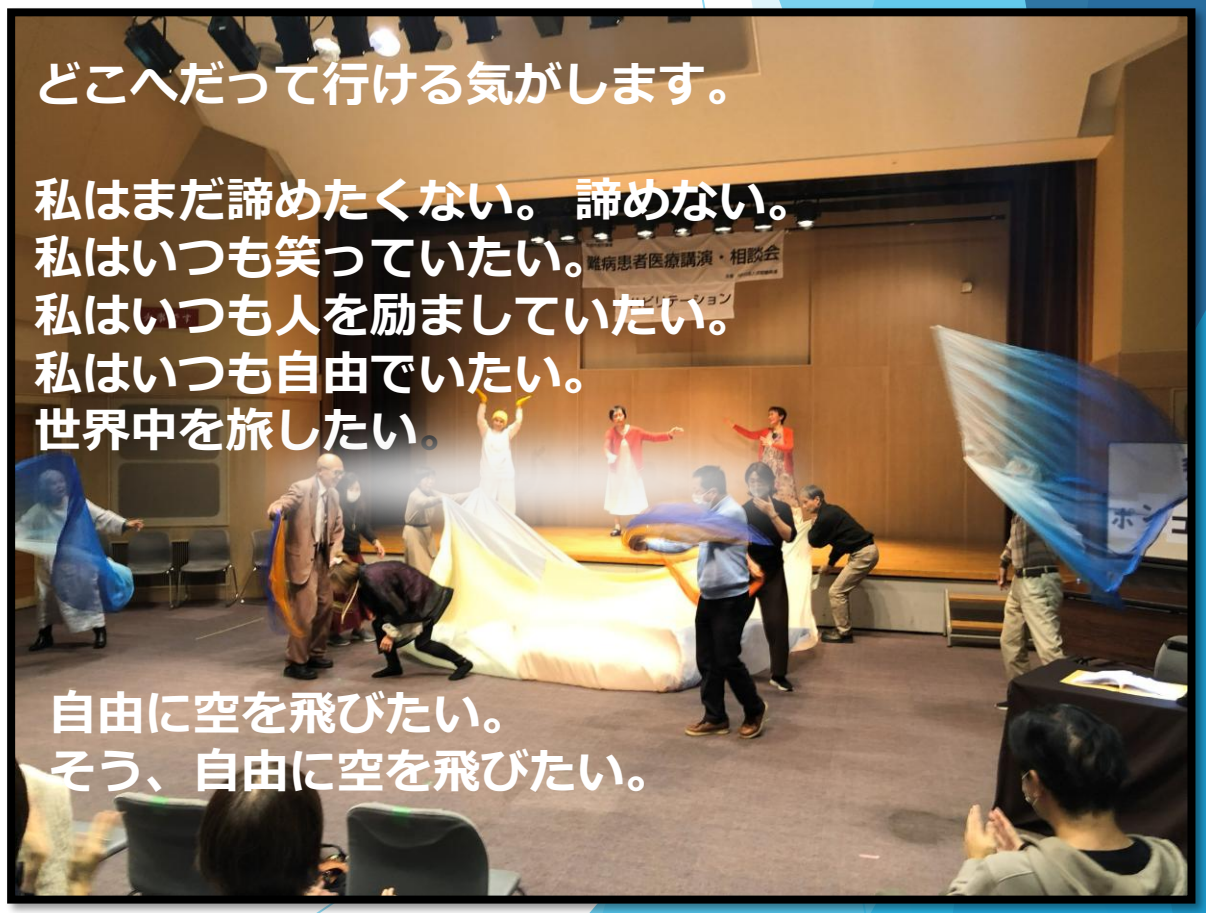
  舞台演劇の手法を使った『声と身体のトレーニング』



京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会／リハビリテーション

- 第２部　演劇　『飛べ！ポンコツロボット』



京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会／リハビリテーション

▶ 第２部　演劇　『飛べ！ポンコツロボット』

＜講師メッセージ＞

あるパーキンソン病患者の方が演劇ワークショップの依頼に来られ、こう言いました。

「一人で発声や動作の練習をするのではなく、誰かに向かって声を出したり、
誰かと関わって動きたい」

演劇のレッスンでは、リハビリと同じように声や動作の練習を行いますが、常に相手役を意識しながら進めます。人と関わることで感情が動き、自然に声が出て体が動く――この有機的な流れを大切にしているのです。
自然な気持ちや衝動に従うことで、本人も思いがけない声や動き、感情表現が生まれることがあります。
演劇を通して得られる効果は、「発声・構音障害の緩和」、「動作のスムーズさの向上」、「姿勢改善」、「感情の解放」などですが、それらはあくまで結果として現れるものです。
目的は「皆と一緒に表現する楽しさを感じること」。
心を開いて表現する楽しさこそが、演劇リハビリの魅力です。

京都市委託事業

難病患者医療講演・相談会／リハビリテーション

- 第３部　アフタートーク

＜参加者の感想＞

舞台演劇の手法を使ったリハビリを始めて10年が経ちます。
週1回、2時間のレッスンを続けています。
パーキンソン病は、身体の動きも声も字までも小さくなっていく病気です。
舞台演劇は一番後ろに座っている観客にも届くよう、大きな声を出し大きな動作をしなくてはなりません。演劇のレッスンそのものがリハビリだと感じています。
また、レッスン場への往復、仲間との語らいもパーキンソン病の進行を遅らせているようにも思います。ご興味のある方、ぜひ一度体験してみてください！

（パーキンソン病友の会 京都府支部　マコ）